

## アモス書1-3章 「正義の預言者」

### 1A 刑罰の宣告 1-2

1B シオンからの叫び 1:1-2

2B 周囲の国々 1:3-2:5

1C ダマスコの犯した罪 3-5

2C ガザの犯した罪 6-8

3C ツロの犯した罪 9-10

4C エドムの犯した罪 11-12

5C アモンの犯した罪 13-15

6C モアブの犯した罪 1-3

7C ユダの犯した罪 4-5

3B イスラエルへの宣告 6-16

1C 四つの背きの罪 6-8

2C まことに力ある方 9-16

### 2A 理由あつての刑罰 3

1B 選ばれた者に相応しくない歩み 1-6

2B 宮殿での暴虐 7-15

## 本文

アモス書を学んでいきます。小預言書に入っていますが、ホセア書、ヨエル書、そしてアモス書に入ります。「アモス」という名は、「重荷」という意味です。イスラエルの国の不正、神への背信に対して、重荷を持っている預言者です。彼は、彼らに対して真正面から、「あなたがたは神の刑罰を受ける」と獅子が吠えるようにして預言しました。このままで行けば、彼らが滅んでしまうことは明らかだからです。「あなたがこのようなことを行なっていて、何の結果ももたらされないとしたら、思い違いだ。あなたが蒔いているものは、必ず刈り取る。」ということを一貫して話しています。

### 1A 刑罰の宣告 1-2

1B シオンからの叫び 1:1-2

1 テコアの牧者のひとりであったアモスのことば。これはユダの王ウジヤの時代、イスラエルの王、ヨアシュの子ヤロブアムの時代、地震の二年前に、イスラエルについて彼が見たものである。

アモスの預言の背景です。前の書の預言者ヨエルは、いつどこで預言をしたのかの背景がありませんでしたが、アモス書はとても詳しいです。そして、その背景がとても興味深いです。テコアという町は、エルサレムから南に 20 ㎞もある南ユダ王国にある町です。私は以前、ベツレヘムのそ

ばにある、ヘロデ大王が葬られたとされるヘロディウムに行ったことがあります。そこからテコアの小さな入植地を見ることが出来ました。本当に、小さな変哲もない村落だったのではないかと思います。そしてアモス自身が、「牧者」であります。エレミヤやエゼキエルは祭司、ダニエルはダビデ王族にいた人ですが、アモスは何でもない平凡な暮らしをしていた人でした。

けれども、アモスのそういった素性と対照的に、彼が預言を行なった時は、ユダとイスラエルの南北とも非常に栄え、強くなり、豊かになっていた時代でありました。「ユダの王ウジヤの時代、イスラエルの王、ヨアシュの子ヤロブアムの時代」とあります。南ユダのウジヤ王は、52 年も治めていました。彼は西にいるペリシテ人を制圧し、東のアモン人、南のアラビア人を抑えていました。彼の政治的影響力はエジプトの国境にまで及んでいたとあります。そして、アモスが預言を行なった北イスラエルでは、ホセア書で学んだように北イスラエル王国の中で最も隆盛したヤロブアム二世の時でした。ヤロブアムは 42 年間も治めており、やはり安定していました。イスラエルの北にあるアラムが、彼の治世の時にアッシリヤによって倒れました。けれども、アッシリヤは自国の中で問題が起こり、その征服したアラムの地域が手薄になっていたのです。そこで北イスラエルはそこにまで影響力を及ぼしました。北と南を合わせたら、かつてのソロモン王国の時の最も栄えた領域に達しています。人間的には、またあのソロモン時代の栄光に戻っているかのようです。

それで、北イスラエルは通商のための幹線道路を自国の領域に入れることができました。それで、富が蓄積されてきました。商業が発達しました。高所得の者たち、上流階級も増えています。人々は豪華な家も建て始めました。そして、その富の中に溺れ、豪華な生活に明け暮れた者たちもいます。そして貧しい人々を蔑ろにしていきました。経済的にも、また裁判所においても、彼らを虐げました。同胞の民なのに奴隷にさえしました。そして道徳的にも退廃しています。ところが、宗教自体は熱心に行なっていたのです。例年の祭りも盛んに行なっています。いけにえも捧げています。それで、神は自分たちと共におられるということは疑うことはありませんでした。災いは自分に下って来ないと思っていたのです。このような中で、北イスラエルに対して、なんと南ユダの片田舎の羊飼いを主が預言者として立てられたということになります。

そして興味深いのは、「地震の二年前」ということです。アモスが預言を行なって、それで二年後に、これから起こるような主の刑罰を予兆するような大地震が起こるのです。バビロン捕囚の後、エルサレムに帰還した民の間で預言したゼカリヤが、ウジヤの時代に地震があったことを言及しています(14:5)。既に、200 年以上経っていても、それでもその地震のことが言い伝えられていたということは、相当な大地震だったのでしょう。考古学により、ハツォルとサマリヤの遺跡から地震の跡が見つかったそうで、それが紀元前約 760 年だということです。ですので、アモスが預言を始めたのは紀元前 762 年辺りなのではないかと思われれます。

1:2 彼は言った。「主はシオンから叫び、エルサレムから声を出される。羊飼いの牧場はかわき、

カルメル山の頂は枯れる。」

主は、シオン、エルサレムにある神の宮におられます。ヨエルの預言でもシオンからの声がかかれていましたが、そこから主が言葉を発せられます。この時点で、北イスラエルのベテルにある神の宮を否定しています。そしてその声は、アモスが普段から目にしていた牧場の草が乾きます。それから、「カルメル山の頂」が枯れます。カルメル山は、北イスラエルの地中海に面するところにある山です。あのエリヤがバアルの預言者と対決したところですね。そこは海からの湿気により、雨がたくさん降るため緑豊かです。ところが、その頂も枯れるのです。北イスラエルの偶像礼拝を枯らせることを象徴しています。主が、声を発せられることによって、シオンからはるか彼方のカルメル山までを枯らしてしまうという、その言葉の威力を示しています。そして事実、ヤロブアム二世の死後、30年経ったら北イスラエルは物の見事に滅ぼされてしまうのです。

## 2B 周囲の国々 1:3-2:5

そして預言者アモスは、イスラエルを取り巻く周囲の国々に対して、同じように神の刑罰を宣告していきます。

### 1C ダマスコの犯した罪 3-5

1:3 主はこう仰せられる。「ダマスコの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼らが鉄の打穀機でギルアデを踏みにじったからだ。1:4 わたしはハザエルに火を送ろう。火はベン・ハダデの宮殿を焼き尽くす。1:5 わたしは、ダマスコのかんぬきを折り、アベンの谷から、住民を、ベテ・エデンから、王位についている者を断ち滅ぼす。アラムの民はキルへ捕え移される。」と主は仰せられる。

ダマスコは、もちろんシリア、古代名ではアラムの首都でありました。そこに、「三つのそむきの罪、四つのそむきの罪」のための刑罰だと言っていますが、これはただ一つではなく、罪が積み重なっていて、次の罪によって刑罰をもたらすという意味です。これまでも数多くの罪を行なったが、次の罪で、わたしはそれにふさわしい刑罰を下すということです。

それが何かと言いますと、「鉄の打穀機でギルアデを踏みにじった」ということです。ギルアデはヨルダン川沿いの東側の地域です。ヤボク川とヤムルク川の間にある地で放牧に適したところでした。マナセ半部族とガド族の地になっていました。そこにシリアの王「ハザエル」が攻め込んできました。ハザエルが、王ベン・ハダデの僕であったとき、預言者エリシャが彼をじっと見つめて、ハザエルが恥じるほど見つめました。そしてこう言いました。「私は、あなたがイスラエルの人々に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたは、彼らの要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八裂にし、妊婦たちを切り裂くだろう。(2列王記 8:12)」ハザエルは、自分は気弱な男なのにそんなことができましょうか？と言いつつ返しましたが、なんと彼は王に水に浸し

た毛布で彼を殺してしまったのです。そしてハザエルは、このギルアデの地域を、エリシャが預言したように残虐な方法で侵略します(2列王 10:32-33)。主の民とその土地を荒らした残虐な行為のゆえに裁かれます。

そして、その裁きは「宮殿」に集中します。その王たちの仕業に応じて主が報われるからです。そして、ダマスコがアッシリヤにとって捕え移されます。レツインがアラムの王の時、アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルが攻めました。その時、列王記第二 16 章 9 節には、「その住民をキルへ捕え移した。」とあります。

### 2C ガザの犯した罪 6-8

1:6 主はこう仰せられる。「ガザの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼らがすべての者を捕囚の民として捕え移し、エドムに引き渡したからだ。1:7 わたしはガザの城壁に火を送ろう。火はその宮殿を焼き尽くす。1:8 わたしはアシュドデから、住民を、アシュケロンから、王位についている者を断ち滅ぼす。わたしはエクロンにわたしの手に向け、ペリシテ人の残った者を滅ぼす。」と神である主は仰せられる。

二つめの国は「ペリシテ」です。「ガザ」という、日頃よく聞く名前が出てきていますが、「ガザ地区」というのは、まさにこのガザという町から来ています。当時、ペリシテ人の主要な町でした。そして彼らが、「すべての者を捕囚の民として捕え移し、エドムに引き渡した」とあります。これは、ユダの王ヨラムやアハズの時に起こった出来事でしょう(2歴代 21:16,28:18)。ペリシテ人が捕えたユダヤ人を、よりによってエドムに売り渡しました。エドムはユダヤ人を酷く憎む民です。このことのゆえに裁かれます。ここでも、やはり「宮殿」を焼き尽くすと言っています。ペリシテをアッシリヤが攻めます。そしてギリシヤのアレキサンダー大王もガザを攻め、最後にハスモン朝のアレクサンドロス・ヤンナイオスがガザを攻め、ペリシテ人は殺されました。

### 3C ツロの犯した罪 9-10

1:9 主はこう仰せられる。「ツロの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼らがすべての者を捕囚の民として、エドムに引き渡し、兄弟の契りを覚えていなかったからだ。1:10 わたしはツロの城壁に火を送ろう。火はその宮殿を焼き尽くす。」

三つ目はツロです。イスラエルの北、レバノンにあります。ツロの背きの罪は、ペリシテが犯した罪と同じです。捕囚の民を売りました。けれどもペリシテ人との違いは、「兄弟の契りを覚えていなかった」ということです。ツロの王ヒラムは、ダビデから続いていた友情を保っていたので、息子ソロモンと契約を結びました(1列王 5:12)。それにも関わらず彼らを売った、という裏切りです。ここでもやはり、「宮殿」が焼き尽くされると言っています。ツロに対しては、バビロンのネブカデネザルが、そしてギリシヤのアレキサンダー大王が攻めました。このことについてはエゼキエル書 26 章

に詳しい預言があります。

#### 4C エドムの犯した罪 11-12

1:11 主はこう仰せられる。「エドムの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼が剣で自分の兄弟を追い、肉親の情をそこない、怒り続けていつまでも激しい怒りを保っていたからだ。1:12 わたしはテマンに火を送ろう。火はボツラの宮殿を焼き尽くす。」

四つ目はエドムです。エドムは、ヤコブの兄エサウの末裔であり、死海の南の地域を支配していました。そして、ツロやガザがユダヤ人を売って、それを買い取ったのがエドムです。彼らがなぜ買い取るのか？ここにあるように、虐待するためであり、その虐待は憎しみによるものでした。エゼキエル書 35 章で学びました、苦みの根は人々を滅ぼしていきます。エサウのことを話す時に、ヘブル書の著者がこう言いました。「12:15 そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように」そして、ここでも宮殿が焼き払われる預言になっています。エドムの主要な都市であるテマンとボツラが滅びます。テマンはエドム南部にあったと言われます。アッシリヤが紀元前八世紀に攻め入り、マラキ 1 章 3 節には彼の時代にはすでに廃墟となっていることが書かれています。そして紀元前 2-3 世紀には、ボツラの町はナバテア人による古代都市となります。

#### 5C アモンの犯した罪 13-15

1:13 主はこう仰せられる。「アモン人の犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼らが、自分たちの領土を広げるために、ギルアデの妊婦たちを切り裂いたからだ。1:14 わたしはラバの城壁に火を放とう。火はその宮殿を焼き尽くす。これは戦いの日のときの声と、つむじ風の日の暴風のうちに起こる。1:15 彼らの王は、その首長たちとともに、捕囚として連れて行かれる。」と主は仰せられる。

五つ目は、アモンです。アモンの父祖は、モアブと並んでロトです。ヨルダン北部にあり、その首都はラバで、現在のヨルダンの首都アンマンです。彼らはアラムと同じくギルアデの町を攻め入り、その妊婦たちを切り裂いたとあります。そして、酷いことに、その目的は単に「自分たちの領土を広げるため」であった、ということです。単なる貪欲ですね。そのために彼らの首都ラバが攻め取られます。ラバは現在のヨルダンの首都アンマンです。アッシリヤに攻められ、また後にバビロンが攻め捕え移される身となりました。他の国と同じく、宮殿と城壁が攻め込まれます。そして、主はその領土拡大だけのための妊婦切り裂きを激しく怒られて、「戦いの日のときの声と、つむじ風の日の暴風」と強調しておられます。

### 6C モアブの犯した罪 1-3

2:1 主はこう仰せられる。「モアブの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼がエドムの王の骨を焼いて灰にしたからだ。2:2 わたしはモアブに火を送ろう。火はケリヨテの宮殿を焼き尽くす。モアブは、どよめきのうちに、角笛の音と、ときの声のうちに死ぬ。2:3 わたしはさばきつかさをそのうちからたち滅ぼし、そのすべての首長たちを、彼とともに切り殺す。」と主は仰せられる。

六つ目の国はモアブです。ヨルダン中部、死海の東側にあった国です。彼らが行なった背きの罪は、「エドムの王の骨を焼いて灰にした」ということです。おそらくこの出来事は、イスラエル、ユダ、エドムがモアブを攻めた時に起こったことだと思われます。列王記第二三章に記されていますが、モアブがその戦いが不利になったので、「エドムのところに突入ろうとしたが、果たさなかった。(26 節)」とあります。その時におそらく、エドム人の王を殺し、その骨を焼き払ったのではないかと考えられます。主はこのことについて、激しく怒られています。当時の社会において人は生きていた時だけでなく、死んだ後も丁重に葬られます。墓にも尊厳があったのです。ですから、それを掘り起こして骨を焼き尽くすという行為は、冒瀆以外の何でもありません。「ケリヨテ」は、モアブの首都「キル・モアブ」の別名です。他の諸国と同じように、その国の王の宮殿と町が燃えつくされます。これは、アッシリヤがモアブを攻めたとき、またバビロンが攻めた時に実現しました。

さて、ここまでの異邦人の国に対する神の刑罰の宣告でした。主の民であるユダヤ人に対する扱いにしたがって裁かれています。彼らは、主なる神の名を、彼らを通して聞いていたはずでした。しかし、それでも手を出したというところに神は怒りを持っておられます。けれども、今、モアブがエドム人の王に対して行なった仕業に報いられたように、たとえユダヤ人を憎む民であっても、その民には尊厳があります。どんな人も、神のかたちに造られているということです。異邦人に対しては、異邦人に知らされている神から来た良心、一般的な知識があります。人が人に対して行なったことに対して、主は正しくさばかれます(ローマ 2:14-15)。

### 7C ユダの犯した罪 4-5

2:4 主はこう仰せられる。「ユダの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼らが主のおしえを捨て、そのおきてを守らず、彼らの先祖たちが従ったまやかしものが彼らを惑わしたからだ。2:5 わたしはユダに火を送ろう。火はエルサレムの宮殿を焼き尽くす。」

ついに自分たちの同胞、七つ目、ユダに対する言葉になりました。これまでの異邦人の国々に対するものとその内容が大きく異なることに気づかれたかと思います。背いたのが「主のおしえ」です。他の国々に対しては、主が彼らに与えられている一般啓示にしたがって裁かれましたが、神の民に対しては、主が御言葉によって与えられた啓示にしたがって裁かれるのです。「まやかし

もの」とは、偶像礼拝のことです。異邦人には、神について知らされていないので、人を人と思わないような不誠実さが裁かれています。神を知る者たちは神に対する不誠実さにしたがって裁かれています。私たちがいかに、神を知ることに責任を持っているかを思わされます。

### 3B イスラエルへの宣告 6-16

そして神は、主眼としておられる北イスラエルに対して語られます。

#### 1C 四つの背きの罪 6-8

2:6 主はこう仰せられる。「イスラエルの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼らが金のために正しい者売り、一足のくつのために貧しい者売ったからだ。2:7 彼らは弱い者の頭を地のちりに踏みつけ、貧しい者の道を曲げ、父と子が同じ女のところに通って、わたしの聖なる名を汚している。2:8 彼らは、すべての祭壇のそばで、質に取った着物の上に横たわり、罰金で取り立てたぶどう酒を彼らの神の宮で飲んでいる。

これまでの国々と同じように、「三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のため」と言われていますが、ここでは確かに四つの背きの罪を主は並べておられます。一つは、人身売買です。「金のために正しい者売り、一足のくつのために貧しい者売った」とあります。考えてみてください、富のある者たちがこんなことをするのは、貧しいから身売りをするのではなく、富んでいてもします。二つ目は、不利な裁判です。弱い者や貧しい者に対して、彼らが踏みつけられるような判決を下します。これはもちろん、賄賂が裁判官に渡されているからです。金のある者が勝つのです。三つ目は、不道徳です。同じ女のところに、なんと父と子が通っています。そして四つ目は、虐げと不敬虔です。なんと宗教行事の中で、質で取った着物、罰金で取り立てたぶどう酒を使っています。そして、神の宮で酔いしれています。

これが、神に選ばれた、神に知られているはずの民が行なっているのです。人身売買について、同胞の民を決して売りに出してはいけないとレビ記に強く戒められています(25:39-54)。曲がった裁きも強く戒められていますし、質に取ったままにしてはいけないという主の言葉もあります。「出エジプト22:26-27 もし、隣人の着る物を質に取るようなことをするのなら、日没までにそれを返さなければならない。なぜなら、それは彼のただ一つのおおい、彼の身に着ける着物であるから。彼はほかに何を着て寝ることができよう。彼がわたしに向かって叫ぶとき、わたしはそれを聞き入れる。わたしは情け深いから。」

#### 2C まことに力ある方 9-16

2:9 エモリ人を彼らの前から滅ぼしたのは、このわたしだ。彼らの背だけは杉の木のように高く、樅の木のように強かった。しかし、わたしはその上の実と下の根とを滅ぼした。2:10 あなたがたをエジプトの地から連れ上り、荒野の中で四十年間あなたがたを導き、エモリ人の地を所有させた

のは、このわたしだ。

イスラエルの民が荒野の旅でカデシュ・バルネアまで来て、そこから 12 人が偵察隊として約束の地に遣わしました。そこにはカナン人が住んでいますが、その中でも力強いのはエモリ人です。偵察した十二人のうち、十人がそこにいる住民が非常に大きいことを報告しました。「私たちが行き巡って探った地は、その住民を食い尽くす地だ。私たちがそこで見た民はみな、背の高い者たちだ。(民数 13:32)」しかしアモスの預言には、身丈だけでなく彼らの富にある強さもここに比喩的に含まれていることでしょう。しかし、ヨシュアとカレブは主を信じ、従い通し、新しい世代のイスラエル人と共に約束の地に入りました。ここで全てこれらのことを可能にしたのは、主ご自身です。ところが、彼らは自分たちでこれらの富を築き上げたのだと奢り、そしてかつてのエモリ人と何ら変わる事のない生活をしています。私たちがキリスト者だと公言していても、まことの礼拝を忘れ、主に捧げることを忘れていたら、たちまち世の変わらないこと、ただの人になってしまうことでしょう。

2:11 わたしは、あなたがたの子たちから預言者を起こし、あなたがたの若者から、ナジル人を起こした。イスラエルの子らよ。そうではなかったのか。・・主の御告げ。・・2:12 それなのに、あなたがたはナジル人に酒を飲ませ、預言者には、命じて、預言するなど言った。

イスラエルには、神の言葉を伝える人たちがいました。預言者たちです。それから、ナジル人がいました。彼らは、ぶどう酒も干しぶどうも、自分たちが誓約を立てた期間、一切食わずに、そして自分の髪の毛も切らないでいました。主にささげられた者として時間を過ごすのです(民数記 6 章)。ですから預言者は神の御言葉を伝え、ナジル人は信者の模範を示しました。ところがイスラエル人は、そのどちらをも拒みました。ナジル人には、その誓約を破らせ、罪を犯させるつまずきの石を与えました。

2:13 見よ。束を満載した車が押えつけるように、わたしはあなたがたを押えつける。2:14 足の速い者も逃げ場を失い、強い者も力をふるうことができず、勇士もいのちを救うことができない。2:15 弓を取る者も立っていることができず、足の速い者ものかれることができず、馬に乗る者もいのちを救うことができない。2:16 勇士の中の強い者も、その日には裸で逃げる。・・主の御告げ。・・」

「束を満載した車が押えつける」とは、落ちて行かないようにしっかりと縛り付けられている姿ですが、イスラエルがどんなに逃げようとも、頼りにしている力をもってしてもアッシリヤの手から逃げることはできないということです。

このように、「富という病」を私たちは知るべきでしょう。午前礼拝で学んだように、社会では貧しくならないようにあらゆる努力をします。貧困があらゆる犯罪の温床であるかのように話されます。ところが、富んだことによる問題についての対策はありません。しかし、神の言葉には多くの知恵

があります。富を正しく見なければ人を高慢にさせます。富はその人に力を持たせますので、その力に頼り、神に頼りません。そしてあらゆる欲望がそこで引き出されていきます。富そのものが間違っているではありません。神は富ませてくださいます。けれども、そこには大きな責任が伴うのです。主に捧げる、主のために用いる、主に仕え、他者に分け与えるのです。

パウロが金銭について教えた部分を読んでみましょう。テモテ第一 6 章です。「3 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、4 その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、5 また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。6 しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。7 私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持つて出ることでもできません。8 衣食があれば、それで満足すべきです。9 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。」

## **2A 理由あつての刑罰 3**

### **1B 選ばれた者に相応しくない歩み 1-6**

3:1 イスラエルの子らよ。主があなたがた、すなわちわたしがエジプトの地から連れ上ったすべての氏族について言った、このことばを聞け。3:2 わたしは地上のすべての部族の中から、あなたがただけを選び出した。それゆえ、わたしはあなたがたのすべての咎をあなたがたに報いる。

午前礼拝で学びました、主はイスラエルをご自分の憐れみと慈しみによって選ばれました。私たちは主の恵みと憐れみによって成長できます。その選ぴを確かなものとしていきます。主が、その良い行ないさえ予め備えておられると言われるのですから、必ず行ないの実を結ばせることができます。聖霊の働きです。ところが、その特別な選ぴを忘れてしまえば、ただ普通の生活ができるのではなく、神を知らない人より悲惨になるのです。なぜなら、神に拠り頼むように選ばれているのであり、そうではない道を選べばうまくいかないからです。

3:3 ふたりの者は、仲がよくないのに、いっしょに歩くだらうか。3:4 獅子は、獲物がないのに、森の中でほえるだらうか。若い獅子は、何も捕えないのに、そのほら穴から叫ぶだらうか。3:5 鳥は、わながかけられないのに、地の鳥網にかかるだらうか。鳥網は、何も捕えないのに、地からはね上がるだらうか。3:6 町で角笛が鳴ったら、民は驚かないだらうか。町にわざわいが起これば、それは主が下されるのではないだらうか。

ここは、因果関係をとて分り易く喩えて話しています。仲が悪ければ、一緒に歩かない。獅子は獲物があるからほえる。鳥は罟がかけられているから、網にかかる。角笛が町でなったら、民は驚く。このように因果関係がはっきりしています。ですから、彼らが咎を犯せば、災いを主が下さるというのは必然なのだということです。パウロは、肉の行ないについて、騙されてはいけなと言いました。「1コリント 6:9-10 あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。」これらのことを行なっていて、神の国を相続することはあり得ないということです。

## 2B 宮殿での暴虐 7-15

3:7 まことに、神である主は、そのはかりごとを、ご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさない。3:8 獅子がほえる。だれが恐れなだらう。神である主が語られる。だれが預言しないでいられよう。

主は災いを下されることについて、しっかりと預言として明らかにされると言われています。この「はかりごと」は、隠されたこととも訳すことができます。主がご自分に隠してあるものを、預言者を通して語られるのです。例えば、主がソドムとゴモラに火と硫黄を降り注がれるとき、前もってそれをアブラハムと、ソドムの町にいるロトに御使いが告げました。アブラハムに対しては、主の使いは、「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。(創世 18:17)」と言われました。これだけ膨大な預言が、聖書にあるのはそのためです。主が、何かを行なわれる時に、それを初めに前もって伝えて、それで事を行われます。だから、私たちはどれだけ、主を求め、主の言葉を求め、それで御心を知っていくことがいかに大切かを思わされます。

そしてアモスが、自分が預言を語るのを、「獅子がほえる。だれが恐れなだらう。」と言っています。彼は預言の言葉が与えられて、エレミヤのように、自分の内に押さえておくことはできず、それで獅子が吠えるように語らざるをえないということです。

3:9 アシュドデの宮殿と、エジプトの地の宮殿に告げて言え。「サマリヤの山々の上に集まり、そのうちの大恐慌と、その中のしいたげを見よ。3:10 彼らは正しいことを行なうことを知らない。…主の御告げ。…彼らは自分たちの宮殿で、暴虐と暴行を重ねている。」

アシュドデの宮殿と、エジプトの宮殿に対して語りかけています。今、アッシリヤの北からの勢いがついているときに、ペリシテの国にとっても、エジプトの国にとっても、イスラエルの存在は緩衝地域になっています。ところが、どうなっているか、サマリヤの姿を見てみなさいと主が呼びかけておられるのです。すると、「自分たちの宮殿で、暴虐と暴行を重ねている」のです。ペリシテ人です

え、エジプト人でさえ、サマリヤの町の中で行なわれている暴虐は驚くようなことだったのです。

3:11 それゆえ、神である主はこう仰せられる。「敵だ。この国を取り囲んでいる。彼はあなたの権威を地に落とし、あなたの宮殿はかすめ奪われる。」3:12 主はこう仰せられる。「羊飼いが、雄獅子の口から、二本の足、あるいは耳たぶを取り返すように、サマリヤに住んでいるイスラエルの子らは、寝台の隅やダマスコの長いすから救い出される。」

アッシリヤがサマリヤを取り囲み、滅ぼした時の預言です。宮殿が滅ぼされています。諸国の民の宮殿が滅ぼされたのと同じです。

そして興味深いのは、羊飼いが雄獅子から羊を取り返す例えです。これはいったい何を意味しているかと言いますと、羊飼いは命をかけて自分の羊を救い出そうとします。けれども獅子が自分の羊を喰らってしまいました。ところが羊飼いは、羊を救い出すその情熱のゆえに、口からはみ出している二本の足だけでも、または口から出ている耳たぶだけでも、引っ張り出して奪い取ります。したがって、もちろん羊はもう既に死んでいます。けれども全てがなくなったわけではありません。これが、主がこれからサマリヤの町に対して行なわれることです。主はサマリヤを滅ぼされる時に、何とかして、強引に引っ張り出してでも、僅かでも残しておこうとされます。だから民としては失われてしまうのですが、けれども全てが失われたわけではありません。

そしてサマリヤに住んでいる者たちが、「寝台の隅」や「ダマスコの長いす」から救い出される、とありますが、どちらも豪華な姿を表しています。これは壁際に置く、背もたれや肘掛のないソファのことです。中東にある独特のもので、ゆったりとした時間をくつろぐためのものです。「ダマスコ」とあるのは、ヤロブアム二世の時代、ダマスコも彼らのものとしていたからです。このように大きな国の中で、富と豪華の中で溺れていた状態に対する裁きの言葉を表しています。

3:13 「聞け。そして、これをヤコブの家に証言せよ。…神である主、万軍の神の御告げ。…3:14 まことに、イスラエルがわたしに犯したそむきの罪を、わたしが罰する日に、わたしはベテルの祭壇を罰する。その祭壇の角は折られて、地に落ちる。3:15 わたしは冬の家と夏の家とを打つ。象牙の家々は滅び、多くの家々は消えうせる。…主の御告げ。…」

ここでは偶像礼拝の拠点ベテルに対する裁きです。そしてアモス書では、豪華な生き方に対する刑罰を強調しています。上に立つ者がその身分に安住して、貧しい者、弱い者を踏みにじることについて警告しています。「冬の家と夏の家」とありますが、わざわざ季節ごとの家を造っているほど豪華に過ごしていたのです。そしてそれらは、「象牙の家々」です。アモスがずっと宮殿という言葉を使い続けましたが、全ての権威は神から来ますので、神はそうした高い地位にいる人々に特別な計らいを持っておられます。その力をどのように用いるかは、絶えず神に監視されていると言

ってよいでしょう。そして選ばれた民については、さらに特別な計らいがあります。

このようにして、私たちは、「共に歩まなければ、当然ながら、その約束は来ない」ということを学びました。主に従わずして、主に従う時の結果をもらうことはできません。